

教材・教具名： Suzu Tube（鈴チューブ）

製作者：伊瀬知 和枝

主な使用場面・領域・教科等： 音楽

<図・写真>



<材料・製作方法等>

〈材料〉

- ・ホース（本体用：透明，柔らかめ）
- ・ホース（アタッチメント用：本体用より少し大きめ）
- ・鈴（数個）
- ・モール（中の飾り）
- ・輪ゴム（鈴を固定する）

<ねらい>

- ・音楽の授業で、「鑑賞」の時間に使用した。
- ・鑑賞曲「ハンガリア舞曲」の曲中でテンポを変化させ、それに合わせて教師とあるいは自分でチューブを動かすことで、動きや鈴の鳴り方などの変化を感じてもらおうと考えて制作した。

<指導方法・留意点等>

- ・基本的には、一人か二人（教師や友達と一緒に）で、一つのチューブを持って鈴を鳴らすが、二つ以上つなげていき、少しずつ人数を増やしていくことができるようにした。最終的に全員で鳴らして、一体感を味わえるとよいと考えた。

<指導経過・成果・課題・展望等>

- 曲のテンポの変化を、チューブを振る動きや鈴の音などを通じて感じ取れたのではないか。
- 教師と一緒に鳴らしたり、友達と向かい合って（あるいは近くで）鳴らしたりすることによって、相手や他者への意識付けができたのではないか。
- 実態によっては、曲そのものをしっかり聞いた方が良く、鈴の音が余計な刺激になったかもしれない。ねらいや子供の実態に応じて、取り入れたり配慮したりする必要がある。
- チューブをつかめない子供、つかめても上肢の動きに制限があり、実態はそれぞれなので、チューブの使い方を工夫する必要がある。例：チューブを身体に掛ける、チューブをつり下げる等
- チューブをつなげて輪を作ることができたので、3～4人ほどの小集団で、一緒に動いたり音を鳴らしたりすることができた。集団が苦手な子供は、適度な距離を置いて参加した。子供の実態や集団の様子に応じて、人数を調整できて良かった。
- チューブを一つにつなげると、大きくなり過ぎてチューブを振って動かしても、しなりすぎて動きが伝わりにくくなってしまった。
透明のものにしたことで、中に目を引きやすい色の物を入れたり、柔らかめの素材で子供が触ったり握ったりしやすいと考えたが、大きくしても動きが伝わりやすくするためには、もう少し硬いものにする必要がある。